

## ローマ人への手紙 第14章 8節

「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」

ある日、ベランダで横たわる蝶々がいた。広げた羽根を少しも動かすことなく横たわっていた。そこにいることに気付かなかっただら、踏んでしまったかもしれない。死んでいるようであったが、避けて通った。やがて太陽が昇り、温度があがってくると、蝶々はおもむろに羽根を動かし始め、近所に飛び立った。そして、翌日同じ蝶々がベランダに横たわる。今回もやがて気温が上がれば飛び立つだろうと見守った。ところがその気配が無い。羽根に触っても反応が無い。今度はいのち尽きて、ベランダに横たわった。

一度はしぶとく飛び始めた蝶も、今度はいのち尽きた。生死にかかわらず蝶としての生涯を貫いた。ベランダに広げた羽根の美しさは飛んでいる時と変わらない。飛ぶにしても、飛ぶことを止めても、創造主の栄光を蝶なりに現わしている。

生死の間には数知れないいのちのできごとがある。その一つ一つが与えられたいのちの輝きであり、いのちをくださっている創造主の栄光の輝きである。与えられたいのちの生においても、死においても主の輝きはある。私たちは主のものです。

2024年4月18日